

氏名(本籍)	清 矢 良 崇 (福島県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第432号
学位授与年月日	昭和63年2月29日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	社会化過程分析に関する理論的実証的研究 一人間形成過程の解明とその科学的記述のために一
主査	筑波大学教授 教育学博士 辻 功
副査	筑波大学助教授 門 脇 厚 司
副査	筑波大学教授 湊 吉 正
副査	筑波大学教授 Ph.D. 竹 村 研 一
副査	筑波大学教授 草 薙 進 郎
副査	筑波大学教授 糸 野 豊

論 文 の 要 旨

本論文は3部18章、本文276ページ、補足資料及文献47ページ計323ページ（1ページ当たり1200字で400字詰原稿用紙約970枚に相当する）よりなっている。

本論文は社会化（Socialization）という教育学、心理学、社会学、文化人類学など人間形成にかかわる諸科学が古くから考察の対象としてきた主題について、1960年代後半頃から社会学の分野を中心に提唱されてきた新しい研究の視点と方法である現象学的社会学、エスノメソドロジー、会話分析等の、いわゆる解釈論的アプローチに依拠しつつ、根源的な考察を加えたものである。

第一部は、従来の社会化研究の問題点を指摘しつつ、新しい研究視点と方法の必要性を輪じた理論的研究である。parsons, T. に代表される従来の社会化研究は社会化の過程が親や教師など、社会化の担い手による、躰けや教育によって社会規範が後続世代に内面化される過程であるとし、各種の調査や実験などにより、その時期や効果や様態、さらには阻害要因などに関する研究を行ってきた。本論はこのような前提と研究方法が、(1) 社会化過程が躰けや教育といった意図された営みではない日常生活のなかでの、ごくありふれた相互行為を、(2) 相互行為の過程は必ずしも社会規範の授受または内面化の過程ではなく、相互行為の当事者間の緊張の調整過程であることを看過していると指摘する。筆者はこうした見解にたち、科学としての社会学は日常生活での相互行為を科学的に記述する必要があることとその具体的な記述方法を提示した。具体的な方法は

Cicourel, A. V., Garfinkel, H., Sacks, H. らのエスノメソロジー及び会話分析の方法論を採用するアメリカの研究者の先行研究を詳細に検討しつつ提案した記述方法である。

第二部は日常の生活からビデオ装置とテープレコーダーを用いて収集したいくつかの相互行為場面をエスノメソロジーと会話分析をベースとした記述方式により記述し、記述された会話の当事者が両者間の緊張を調整するために、即ち相互行為を安定させるために用いている「方法」ないし「手続き」を明らかにした実証的研究である。

第二部で分析の対象された日常生活場面は大きくは、家庭における社会化場面と学校における社会化場面に分けられる6つの相互行為場面である。具体的には排泄訓練場面、親が子を叱る場面、子どものテレビ視聴場面、初期テスト経験場面、生活指導場面、三者面談場面である。これらの場面での会話の収集と記述と分析によって従来の社会化研究が社会規範の内的過程としてきた社会化過程は、そうである以上に、相互行為者の言語活動を中心とした文脈依存的表現 (indexical expression) の運用過程として扱えられるべき特徴をもつことが明らかにされた。

第三部では、第一部、第二部において展開された理論的実証的研究を踏まえ、日常生活の実際的な問題を解決すべく意図された社会学が真にそうした要請に応える成果をあげているかどうかをあらためて検討されるべきことをWeber, M. の社会科学論を手がかりにしつつ新しい社会科学論として展開している。そこで示された1つの見解は社会学は実際の問題関心と問題解決の要請から一旦身を引き純粋に科学的な関心からの記述に徹し事実の蓄積を重ねる以外に科学としての役割を果たしえないというものである。

審 査 の 要 旨

本論文は従来の社会化研究の主流をなす規範的アプローチに対し解釈的アプローチとして対比される新しい方法論、すなわち Scudts, A., Berger, P. L., Luckmann, T., Cicourel, A. V., Garfinkel, H., Sacks, H., Mackey, R. W., Speier, M. らが提唱し実験的な研究を行ってきた現象学的社会学、エスノメソロジー、会話分析などの新しい分析視点と分析方法を十分に理解した上で、その利点をさらに洗練させつつ理論化し、しかも、その理論と方法にもとづき実際に資料を収集し分析を加え、その有効性を実証した点で高く評価されるものである。社会化研究という1つの領域の研究ではあるが、新しい研究方法にもとづく本論文により、教育社会学の領域の研究と理論が非常に高まる可能性を示したことは貴重である。

しかし、一方新たな方法論の確立を急ぐあまり意欲が先行し論議が過剰になっていることも否めない。今後さらにさまざまな場面における社会化過程の資料を収集し分析を深め理論と方法の精緻化を図ることか望まれる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。